

森林生態系サ - ビスを持続・発展させる森林づくりとニホンジカ問題

平成18年11月27日 ベルクラシック甲府
東京農工大学大学院助教授 古林賢恒先生

山野で他県と接する山梨県は、耕作地が少なく山野が多いところである。御料林が明治44年に下賜され、その後、多くの人々の愛林思想に基づく植林活動の甲斐あって、緑のダム・森林のもつ治水機能が発揮する山が出来上がった。その結果、水害問題に泣くことなく二次産業・三次産業の場を育むこととなった。この100年間は「明治・昭和の山づくり」と呼ぶに相応しい現場があった。その矢先、大食漢のニホンジカが森林地帯で分布を大きく広げ、県下のいたるところで森林植生に過食圧がかかるようになってきた。他の県における事例から判断すると素早い対応が求められる問題である。

本来の生息地ではない森林にシカが生息することで多くの弊害を伴うことになる。

シカの食害地に立つと目を見張るものがある。

嗜好性の高い植物種は消滅して不嗜好性の植物が繁茂する。

木本植物が剥皮され次々に枯損している。

ササのような耐性の強い植物も大規模にわたり分布が退行している。

さらに過食圧がかかれば草地化する条件をもつ場所も見受けられる。

高標高地帯の現場ほど自然の緩衝能力が低いために、生物群集の崩壊に

歯止めが利かなくなり群集の安定性の乏しい現場になっている。

共存するという言葉には良い響きがあるが、ニホンジカとの共存の実現にはかなり難しい実体がある。共存するとは、人とシカが互いにもっている潜在的な能力を最大限発揮できるような両者の関係を築くこととある。シカとの共存という社会的合意形成の内容もさることながら、これまでの山づくりとは少し異なる大きな出費が必要になる。

森林の植林事業を少し角度を変えて見ると、

「草食獣であるシカに、捕食者がいない、つまり負のフィードバックがかかりにくい環境下で伐採や火入れなどにより良質な食物を大量に供給すると、森林の植生はどのような影響を受けるのだろうかという大実験が日本各地で繰り返された。」

ということになる。

その結果、20年から30年でシカの個体数が爆発的増加を示し、森林の生物の多様性が急激に劣化し、「森林生態系のサ - ビス」といわれる森林生態系のもつ各種機能の低下することが明瞭になった。

シカ問題を考えるにあたって大型草食獣の持続性のある適切な管理には「遊牧」という手本があるが、人口密度が高くなった国土の狭い日本では無理な話である。そのため農林業の適地から離れた高標高地にシカを追いつめる管理となった。追いつめられたシカは場所を移動する遊牧的戦略がとれない故に、食物の種類を経年的に変えて行くとい

う手段により延命を図っている。なかなか手強い相手である。その挙げ句の果てが樹皮喰いである。樹皮を剥かれた個体は当然枯損する。森林の草地化が進むこととなる。

今から数千年前、ヤギとヒツジを連れたボ - トピ - プルが日本列島に渡来していたら森林の植生はどうなっていただろうか。想像するだけでも恐ろしいが、その結末は栃木県日光の足尾銅山の跡地に見ることができる。そこでは生産基盤の土壌が流出し、岩盤の裸出する現場がある。現在、ヒツジやヤギに変わって大食漢のシカが森林を飛び跳ねているが森林の植生はどうなるのか心配である。水害対策に頭を悩ました時代があった。その時の芝草生地を森林に変えた勢いが必要になる。生物の多様性の低下した植生を早く回復させる体制を確立しなければならない。

「明治・昭和の山づくり」と呼ぶに相応しい現場は、森林の自己施肥機能により土をつくる、つまり生産基盤をつくる場であった。100年近く経過した山では樹木が大きく育ち、土壌が再生された。国家百年・千年の大計を立てるには計画性のある山づくりが必要であることを教わった。機械化が導入され工的な活動で推し進められた大規模なカラマツ植林地帯は、効率的な山づくりを追求してきたことになる。これからは豊かな人々の生活を支えるために多様な機能を持つ場が求められる時代がやってきた。効率に加えて安全と快適を追求する森林施策時代の幕開けである。「森林の生物の多様性」を保全するための森林管理のあり方を問題にしなければならない。大きく広がる植林地の伐採のあり方が問われることとなる。

「明治・昭和の山づくり」から「平成の多様な森林づくり」へと森林施策の変わり身が期待される。そのためには「森林の生物の多様性を保全する」ための技術づくりが、強く求められる。その中でニホンジカ問題を取り上げなければならない。

1頭のシカを支える食物の量を明らかにし、気温・土壌の違いによって生産されるシカの食物が何処にどれだけ現存するのか。植物が再生産できる範囲でどれだけシカを養うことができるのか。シカの個体数をカウントする方法などなど、共存するために早急に始めなければならない調査・研究は多い。それと併行してシカの個体数をコントロールする方法は急を告げる。狩猟人口の高齢化と減少に歯止めがかからない現在、過食圧によって退行する植生を回復させるためには大胆な個体数コントロールが必要になる。

戦後50年にわたる大実験は、人間の生産活動と野生動物の生活場所を容易に「すみわけ」ができない結果となった。すみ分けには農林業地を「フェンスで囲む」方法しかない。そのため多くの出費が必要になる。また、早いうちに芽を摘み取ることができなかったこともあって、分布を大幅に拡大した後の個体数コントロールにもなかなか名案がない。

「平成の多様な森林づくり」には、技術面だけをとっても林業生産・森林生態全般・野生動物の生態・栄養学的側面・集団遺伝学・保全生態学といった学際的な調査・研究チームを育てなければならない。「森林の生物の多様性を保全する」ためにニホンジカ問題にどのように対処して行くかを考える体制づくり、社会的合意形成づくりの場が求められている。